



阪神淡路大震災の記録から学び、自分のこととして考える手がかりを知る。

心理学科
地域と
ともに学ぶ

震災で人々が傷つき、立ち直っていく過程に触れる

大規模な自然災害は見えるところだけではなく、人々の心に大きな傷跡を残します。人々は災害からどのようなダメージを受け、そしてどのようにそこから回復していくのか。そのことを知るための試みとして、心理学科臨床心理学コースの5つのゼミで、1995年に発生した阪神淡路大震災に関係する2つの施設を訪れました。

「人と防災未来センター」では震災被害を再現したリアルな映像を視聴。東日本大震災をはじめ、学生たちが生まれる前のものも含め日本各地で発生した数々の震災の記憶とリンクする「被害」の記録は、大災害を「自分ごと」として考えるための大きな手掛かりとなります。また、震災遺児のケアに携わってきた施設「神戸レインボーハウス」も訪問。親や家族を亡くして心に傷を負った子どもたちを支援する施設のドキュメンタリーを視聴し、施設の方のお話を伺いました。

人の心を学ぶ学生たちが実際に起こった出来事を知り、予期しない災害によって人はどのように傷つき、そしてそこから立ち直っていくのかの過程と手掛かりを知るための貴重な機会となりました。



実習に参加した学生からは「人は一人では生きていけないと知った」「誰もが支え合っているとわかった」との声が。他者の立場に立ち、自分のこととして考えることが心理支援では大切です。学ぶことで、人生に関する多くの気づきがあると思います。

社会学部 心理学科
専門分野／臨床心理学
林 郷子 教授 HAYASHI Kyoko

心理学科のフィールド・アクティビティ

- 人と防災未来センター見学研修
- 小学生を対象とした地域臨床実践
- 法的配慮に基づく対人援助について弁護士との意見交換
- 精神疾患の家族的看護の史跡見学
- 放課後等デイサービスの見学研修
- 神戸レインボーハウス(震災遺児ケア施設)見学研修